

# 一九五七年度活動方針

## 三池炭鉱労働組合

### はじめに

一昨年の行動方針でわれわれは「話し合いの場を」作ることとを掲げ、昨年は四十三日ストの後を待たず「一切の活動を」抵抗「の二年に備えて」闘争することとした。本年は、五千三百名ほどの対決と、重大な課題に直面し、「雇の向上」と「意志の統一」に目標をおさたことである。このことは総評が「雇より賃へのスローガン」を提せられたように、最近の労働関係（労働力関係）を正しく理解するに必要とされ、第一行動をとりよる必要とをうけてきたのである。

われわれは二十八年の炭協協成、企業整備闘争以来、三池労組の組合員であることに誇りを持ち、炭労の中核として組織の拡大なることを目標をもってきた。しかし、われわれは未だ三池の組織は完全でなく、いくつもの弱点をもっていることを反省せねばならない。この反省はどのようにつとめられたか、またどのようにつとめられたか、これを明らかにする必要がある。今までの歴史を振り返り、われわれは「われわれは」五年以上つとめた組合員はなかつた、組合員は「われわれ」の組合員である。闘争は「われわれ」の闘争である。われわれは「われわれ」の組合員である。われわれは「われわれ」の組合員である。われわれは「われわれ」の組合員である。

「最後の勝利を得るまでは、恐らくわれわれは何度も負けるだろう。或いは負けつづけるかも知れない。なぜならば、われわれが負けなくなつた時はわれわれが最終的に勝つ時だから、われわれは負けることによつても強くなることのできる」

この闘争は「われわれ」の闘争である。われわれは、次の闘争に備えて、話し合いの場を「われわれ」の話し合いの場とする。話し合いの場を「われわれ」の話し合いの場とする。話し合いの場を「われわれ」の話し合いの場とする。

「組合員である前に、先ず会社に忠實な従業員である」者が多いことである。このことは多くの例を挙げるまでもないが、例えば誰かが当然に賞成すると思われられるような問題でも、スト権発動の場合、きまつて何百名の固定的な反対票があることも考えねばならない。あるいはまた、採用・配属転換その他日常の諸問題に、組合に相談するよりも会社の職制に相談する人を多く見受けられるのである。更にまた、自分の保身や収入を増すために職制と対決するよりもむしろ無抵抗であり、組合運動には無関心な人もある。

このような個人々々が階級人として質的に向上し、個人の利害よりも全体の利害を優先して考へるところまで成長しなければならぬ。それがあらゆる運動の基本的問題である。ところでわれわれはこの質の向上を達成するためにも、次第多くの面で組織的に改善を必要とするところがある。

先ず第一にわれわれは前にも述べたように、三池の強さを自他共に許して来たと思う。しかもその強さは全組合員による勝利の波にのって進んだ結果であり、労働者の理解がゆがめられてはならぬ。その意味において、われわれは執行部、決議機関、個々の組合員が、三池の強さに對する単純な自意識過剰に陥つていなかつたか、を反省する必要があると思う。各人がそれぞれの地位において「風」を吹かせたことにはなかつたかを願つて、一層組織づくりをやり直して決意を新たにするべき段階だと考える。

次は大衆討議の不徹底な点である。会議の決定に順りすぎて本意に大衆が理解し納得していかぬことがおぼろげにあられたか。また「大衆討議」が「大衆討議」で済んだか。また「大衆討議」が「大衆討議」で済んだか。また「大衆討議」が「大衆討議」で済んだか。また「大衆討議」が「大衆討議」で済んだか。

幹部の官僚化が生れ、経理主義と場当たり主義がうきまわることとを決定する。

第三は、地域分會や主婦会に對する指導理念が不徹底ではなかつたかという点である。幾分ながら現段階ではまだ組織的時代の狭い意味の世話活動から脱皮してない。即ち、地域分會や主婦会の本来の任務は民主的社會建設と労働管理に對する主権の確立に在ればならないが、今日ではまだ物品販売や、リクレーションにその大半の力を時間を消耗して、生活革命運動の實踐を通じて推進される袋けり運動（一人の苦悶を皆んなの問題として考える）や組合教育又は封建的慣習勢力の改革を主たる活動とするまでに致してないようである。従つて地域分會が職場分會といかに違つていよう。主婦会が校区婦人会とどう違つていようかを明確にし、活動の方向を統一する必要がある。

第四に、「わが山主義」が克服されてないことである。支部の特殊性がまだ強く残つていないか。それが三池は単一組織でありながら連合体的性格を抱え込んでいないだろうか。そして六支部の交流を阻んでいないか。また反省することは多い。われわれは昨年、組合結成以来十年にして各支部・各職場の隔された条件を出し合つて到連闘争を組むまで成長したことを想ひ起さねばならない。ここまでに伸びたといひながら、なお「わが支部、わが職場、わが職種」の王様が扱われたと願つては早計である。三池連六六の交流や、西三池の交流を云々する前に、三池六支部の交流と相互の理解を深める運動を徹底せねばならぬ。

なおこの他に「職場闘争に對する理解」も改めて深められねばならぬ。職場闘争を単なる「物取り」だけに限定して考えるとか、大きな誤りを犯すばかりでなく職場闘争は多くに行きまわつてしまつて職闘の任務を正しく理解する活動を行わねばならぬ。

以上の諸点は一応これまでの運営を通じて、反省される点であるが、この四つの問題は當然に会社側がわれわれに對して攻撃の餌先を向けるわれわれの弱點である。従つてこのような見方で本年の活動を展開するに當つては先づ二万六千人の意志の統一が先決問題である。ある人々は右を向き更にある一群が後を向いたまゝで斗争を組むことは、極力避けねばならない。即ち少くとも「意志統一のできない間は行動を起さない」といふのは「統一のできる限界までしか行動しない」といふ種の慎重さと徹底を期した。